

ソウルの博物館をたずねて
(東国大学校博物館常設展・韓国国立中央博物館「100周年記念特別展」)

平成21年6月5日から7月12日まで当館で開催した特別展「朝鮮王朝の絵画と日本」は、西日本では岡山会場のみという事情もあってか、韓国や中国からの熱心な入館者が目立った。そんななかでも、ギャラリートークをお願いした鄭于澤先生門下の東国大学校(ソウル市)の学生が、土・日曜日の2日間じっくり時間をかけて仏画に見入っている姿が印象的だった。朝鮮仏画が多く伝来する岡山には頻繁においでになっている鄭先生とは十数年前から面識があって、「ソウルに来たらお立ち寄り下さい」と常々暖かい言葉をもらっていたが、今回の特別展を機に、その言葉を真っ正直に(?)に受け止め、9月末になってようやく夏休みを取って東国大学校博物館へ押しかけた。

東国大学校は、ソウル市内にある仏教系大学で、構内には附属の博物館(東国大学校博物館)がある。展示スペースは小規模ながら、仏教美術を中心としたコレクションが充実している。韓国仏教の黄金時代である統一新羅時代・高麗時代の石造仏、墓誌などから、李朝時代の書画彫刻まで、見やすく工夫された展示構成となっている。コンパクトな空間でじっくりと国宝クラスが観覧できるのは、足腰弱くなるお年頃には嬉しい。東国大学校博物館を観覧したのは学生食堂で昼食。同日(9月28日)の夕方からは「韓国博物館開館100周年記念特別展」の開会式と内覧会があるので行きましょと誘われた。

1909年11月に李朝最後の王である純宗が王家所蔵コレクションを一般公開した「帝室博物館」が発足して100年。この記念特別展には海外からも多くの作品が里帰りしていた。第1部の展示は帝室博物館時代から、日本統治時代、戦後の再スタート時代、多趣多数の博物館が設立された文化力成長時代、1990年以降の文化的成熟を追究する時代と、5つの時代に分けて構成され、第2部は韓国の誇る秀逸の文化遺産を一覧できるものであった。この日の内覧の時間は1時間ほどしかなかったので、まずは第2部のうちの仏教関係のみ鑑賞で時間切れとなった。したがって、ソウル滞在最終日となる翌日、再び同博物館に足を運んだ。古代から21世紀まで連続と続く日韓の交流の深さを再認識すると同時に、その多様で奥深い美しさに魅了された。もちろん、メトロポリタン美術館所蔵の水月観音図など、在アメリカ作品を岡山から空路1時間のソウルで鑑賞できたのは本当に有り難かった。

【主任学芸員 中田利枝子】



東国大学校 正門



寺院(奉恩寺)と高層ビルのマッチング。数十年前までは畑に囲まれていたという

平成21年度 展覧会スケジュール(平成22年1月~3月)

特別展紹介(地下展示室)

平成22年1月26日(火)~2月21日(日)「ハプスブルク帝国の栄光 華麗なるオーストリア大宮殿展」
3月5日(金)~4月4日(日)「悠久への回帰—高橋秀展」

岡山的美術展紹介(2階展示室)

平成22年1月22日(金)~3月22日(月・祝)「所蔵コレクション展—新収蔵品を含む—」[国吉康雄・線描の魅力]

お知らせ

当館は冷凍機更新工事のため、平成21年12月7日(月)から平成22年1月21日(木)まで休館します。次回開館は、1月22日(金)岡山的美術展「所蔵コレクション展—新収蔵品を含む—」[国吉康雄・線描の魅力]からとなります。

編集後記

本号では、ドイツで行われた研修に参加したり、展覧会観覧のために韓国まで足をのぼしたりといった、当館学芸員のワールドワイド(?)な活動ぶりを紹介しました。学芸員の仕事は、本を読んだり、ものを書いたりといったインドアな職業だと思われ方が多いかもしれませんが(もちろんそれもあります)、展覧会を企画・開催するにあたっては、作品の調査や借用・返却といった作業で東奔西走しています。また、全国各地で開催される様々な展覧会に足を運んだり、研修会に参加することで勉強を重ねているのです。 [S.T.]

美術館ニュース 第87号

発行：2009年12月

発行者：岡山県立美術館

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48

TEL：086-225-4800

URL <http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/>

E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

ハプスブルク帝国の栄光
華麗なるオーストリア大宮殿展

2010年1月26日(火)~2月21日(日)

会場/地下1階 展示室

休館日/毎週月曜日(2月1日・8日・15日)

観覧料/大人1000円(800円)、高大生700円(500円)、
小中生300円(200円)、65歳以上500円

()内は、前売券ならびに20名以上の団体料金

宮殿はその国の代表的な建築であり、美術品の宝庫です。本展では、ウィーンの王宮コレクションから、ハプスブルク帝国の栄光を象徴する、皇帝・皇后ゆかりの絵画・工芸・食器・家具・宝飾品など、さまざまなジャンルの作品およそ200点を、オーストリア王宮家具博物館の全面的な協力のもとご紹介いたします。さらに王宮のほか、シェーンブルン宮殿やベルヴェデーレ宮殿などの建築や庭園の美を、映像資料を交えながらご紹介いたします。宮殿にスポットを当て、華麗な宮廷生活の美をご紹介するこの展覧会は、数百年にわたってヨーロッパに君臨したハプスブルク帝国の真髄に迫る機会となることでしょう。

この展覧会は東京富士美術館(東京都八王子市)の企画によるもので、日唄修好140年を記念した「日本オーストリア交流年2009」への参加行事です。



ゲオルク・ラープ (皇妃エリザベート) シンシ博物館蔵



シェーンブルン宮殿「駿馬の間」(水彩画によるリトグラフ) オーストリア王宮家具博物館蔵

「悠久への回帰—高橋秀展」 2010年3月5日(金)~4月4日(日)

観覧料/当日券：一般1,000円 大・高校生および65歳以上500円 (小・中学生は無料)
前売り券：800円 (一般のみ) 20名以上の団体は2割引

高橋秀は1930年に広島県に生まれました。1950年代初めから独立美術協会展に出品し、1960年に独立最優秀賞を受賞しています。1961年には第5回安井賞を受賞し、一躍画壇で脚光を浴びました。その評価に安住することなく、新たな環境を求め、1963年にローマに留学。イタリアの前衛芸術に触れながら独自の抽象表現を獲得し、作品には丸味を帯びた曲線のフォルム、割れ目や裂け目が現れるようになりました。「エロス」の追求は高橋の最大のテーマであり、1970年代には官能的フォルムとして、明確に提示されるようになります。内外での評価が高まり、1987年には芸術選奨文部大臣賞を、1988年には第20回日本芸術大賞を受賞しました。1993年にはローマ国立近代美術館で個展が開催。1994年には紫綬褒章を受章しています。1996年より倉敷芸術科学大学教授を務め、アトリエを岡山県の沙美に移して旺盛に制作を続けています。

近年は、日本の伝統的な芸術作品から抽出した要素を取り入れ、線や色彩、フォルムに独自の美意識と美的な感覚を盛り込んだ大作に挑んでいます。今回の展覧会では、とくに琳派に発想を得ながらも自由な展開を繰り返す新作の大作群を中心に、高橋秀の画業を振り返り、代表的作品による高橋芸術のエッセンスを紹介します。

関連事業

「高橋秀展記念対談」2010年3月13日(土)14時~
会場：当館2階ホール(定員210名) ※聴講無料、先着順、事前申込不要 パネリスト：高橋秀氏、鍵岡正謹(当館館長)
ワークショップ「高橋秀と絵をかこう—高橋秀展をみて—」2010年3月27日(土)、28日(日)各日14時~
講師：高橋秀氏 対象：小中学生
美術の夕べ「高橋秀展をみる」2010年3月26日(金)18時~
会場：地下1階展示室 ※参加には観覧券が必要です。 講師：妹尾克己(学芸課長)
※関連行事についての詳細は美術館にお尋ねください。



正阿弥勝義「番盆(亀)」 「穂落之図(鶴) 香炉」



「日月図のうち」上弦】2009年



「日月図のうち」起源】2009年